

酒が絡んだ古典落語は結構ある。「親子酒」や「長屋の花見」などがよく知られているが、代表作といえば「芝浜」だろう。人情噺の代表で長編である。名人と呼ばれる名だたる噺家たちが演じてきた。

勝（かつ）こと勝五郎は、魚河岸で魚を仕入れ得意先に売つて歩く魚屋である。腕はいいが無類の酒好きで失敗ばかりしている。その日も女房に起こされ一日酔いでしぶしぶ魚河岸へ向かう。途中で芝（今の港区芝あたり）の浜辺に寄ると、海岸で大金の入つた財布を拾う。大喜びの勝は家に持つて帰り、友人と酒盛りをはじめ泥酔して寝てしまう。

翌朝、目が覚めた勝は財布を探すが見当たらない。女房に尋ねると、そんなものはない、金ほしさに酒に酔つて夢を見たのだろう言われる。女房の涙ながらの説得に自分の情けなさを反省した勝は、酒を断つて仕事に精を出すことを決意する。

3年間、酒を断つて働き小さな店を構えるまでになる。その年の大晦日、勝に女房が打ち明ける。大金を拾つた夢の件は、実は夢ではなかつたこと、心配になつた女房は勝が寝たあとに長屋の大家に相談し、お上に財布を届け、夢だつたと嘘をついたこと。3年がたつて、持ち主がなく大金は勝のもとにもどつてきたこと。

騙したこと詫びる女房に、勝は自分を立ち直らせようとするけなげな女房と、どうしようもで女房は、もう大丈夫だから、今日は一杯飲んでおくれ、酒と肴の用意がしてあるからとすすめる。それを聞いて勝は、「そうか？ ありがてえ。飲みたかつたんだよ」と、酒の入つた湯呑を嬉しそうに顔の前に持つていく。だが、そこで、飲むのをためらう。そして一言。「よそう。また夢になるといけねえ」。

この噺の聴かせどころは、勝を立ち直らせようとするけなげな女房と、どうしようもない酒飲みから立ち直つていく勝との夫婦のやりとりである。この噺を演じてきた名たちは、このやりとりにそれぞれの独自の脚色を加えて笑いと涙を誘う。だが、この噺の凄いところは、それだけでないところである。ストーリー全体と最後のオチに、実に深い意味が隠されているのである。

落語のオチを説明するくらい不粋なことはないと承知の上であえて触れると、あんなに酒好きだった勝が飲むことをためらつたのは、大金が手に入つたことが夢であつてほしくないという思いだけでなく、この3年間酒を断つて魚屋がうまくいきだしたことが、もつと言えば、ここまで自分が歩んできた道のりが、翌朝起きたときに、実は、長い夢だったということになつてほしくないという心配からである。

私たちにもそういうことはよくある。ああ夢でよかつたと安堵することや、なんだ夢だったのかと落胆すること、さらには、いま目の前で起きていることは夢じやないよなど疑心暗鬼になること、ときには、夢であつてほしいと願うこともある。

人の一生なんてえものは、「夢」と「現実」の間を日々行つたり来たりしているようなものかもしれない。

「また夢になるといけねえ」には、そんな意味が込められているのだ。